

宮沢賢治「黄いろのトマト」論

The study of “Yellow tomato”

高橋直美*
TAKAHASHI Naomi

要旨

宮沢賢治の童話「黄いろのトマト」は、純粋な子どもの世界から現実の大人の世界に足を踏み入れた兄妹の悲しい出来事を通して、子どもが大人の世界を認識する物語として評価されてきた。

しかしながら、主人公である「私」と博物館に展示されている蜂雀（ハチドリ）の剥製との関係や、妹のトシを失った賢治の心情、そして賢治の基幹をなす『法華経』信仰の視点からも考える必要があるだろう。

子どもは純粋であるが、倫理ではなく感情に支配されてしまう。感情そのものに問題はないが、自らの欲望のままに行動すれば悪い結果が生じてしまう。因果応報は、罪の意識がなくても悪因を作ると悪果が生じてしまう理である。

また、子どもらしい純粋や、自分の世界を持つことはよいことであるが、その空想世界でのみ生きることの危うさ、好奇心を良い方向に持つて行くことの大切さなどを読者に考えてほしいと願い、賢治は子どもの心の糧となるような内容を一編の童話としてまとめたと考えられる。

キーワード：黄いろのトマト、子どもの世界、法華経、因果応報

*東洋大学ライフデザイン学部生活支援学科 Toyo Univ. Faculty of Human Life Design
連絡先：〒351-8510 埼玉県朝霞市岡48-1

1. はじめに

「黄色のトマト」の先行研究は多数あるが、中でも、杉浦静「『黄いろのトマト』試論」(萬田務・伊藤眞一郎『作品論 宮沢賢治』1986年7月 双文社出版)はこれまで数多くの論文に引用されており、ペムベルとネリの生活を純真に保つことで、より大人の世界との接触とそれからの拒絶による心の痛みを、より際やかに描き出しているのである(p.76)。

(中略)

ペムベルとネリの物語は、いうならば、「純真な心意の所有者」が、「純粹な心意」のままで、「卑怯な成人」の世界に入っていこうとし、傷つけられる物語である。しかし、この純真と卑怯ということも相対的なものにすぎない。「純真な心意」の側から見た「卑怯な成人」の世界も、成人の世界に立ってみれば、純真とは単なる無知の謂に他ならない。それが、ペムベルとネりに悲劇をもたらすことになるのである。(p.79)

と述べ、子どもと大人の価値観の違いからくる悲劇を示した兄妹の物語であると考察している。

また、西田良子は「『黄いろのトマト』」(『黄いろのトマト』『国文学 解釈と鑑賞』(2000年2月至文堂))で、

おとなと離れて「子ども二人だけで暮らしていた」という設定が、実はこの物語の重要なポイントであって、それ故にペムベルとネリは「かあいそう」な出来事を体験せざるを得なかったのである。(p.66)

(中略)

「おとなのいない二人だけの世界」は「日常的な生活」とは異なり〈子どもの認識〉や〈子どもの価値〉〈子どもの論理〉だけで成り立っている「非日常的な世界」であった。

ことを指摘し、〈無邪気〉や〈無知〉である子どもが大人の世界、すなわち「日常的世界」に入らなかったことは「かあいそう」であるが、賢治がなぜこのような悲しい結末にしたのかは「謎」とであると述べている(p.71)。

一方、子ども論的観点から押野武志は「ロマン派的小児観の諸問題—賢治童話の中の子供たち—」(『日本近代文学 (55)』1996年10月)の中で、賢治の子ども観に現れるセクシャリティの資質と大人と子どもを差異化する独特の方法について述べ、工藤哲夫も「『黄いろのトマト』—〈二人だけ〉の世界—」(『国文学 解釈と鑑賞 61 (11)』1996年11月 至文堂)において、

〈二人だけ〉の強調と悲劇的結末の意味するものは、未だ〈仏法〉の了悟に至らぬ賢治が、そこ「に近づく一歩」として、一度は自らの悲しみの体験をこそ徹底的に作品化することによって一種の自己治療を試みたということではないだろうか。(p.82)

と考察し、賢治と妹のトシとの関係に着目した。松田司朗も『宮沢賢治の童話論—真相の原風景—』(1986年5月 厚徳社)で妹トシとの死別に触発されてこの物語を書き、妹と二人でいることの〈罪の意識〉や〈近親相姦〉にモチーフを見出していると述べている。

また、視点の異なるものとしては黄英の「『黄いろのトマト』—サーカスを手掛かりに—」(『国文学 解釈と鑑賞 66 (8)』2001年8月 至文堂)があり当時のサーカスという存在と、子どもたちに起こった悲劇との関連性を指摘している。

他にも、さまざまな視点から切り込んだ論文が存在するが、その大多数は、ペムベルとネリが自分たちにとってかけがいのない黄いろのトマトを黄金の代わりにサーカスの番人に差し出すが、受け取ってもらえないどころか、そのトマトを投げつけられて泣きながら走って帰ったことを蜂雀が「かあいそうなこと」と述懐し、子どもの純粋さが大人の日常生活では通じず、暴力的に排除されたことによる悲しみであるとまとめている。

その一方で、森井弘子は『『黄いろのトマト』小考』（『うずのしゅげ3』1997年5月 関西賢治ゼミナール）で、

しかし、「かあいそう」なのは、番人がお金として認めずして、サーカスを見せてくれなかったというようなそんな類のことなのだろうか。ここでいう「かあいそう」というのは、二人にとって、大事な大事なトマトを投げつけられた点にあるのではないか。（p.76）

と指摘している。

本論では、黄いろのトマトの持つ意味、登場人物とその世界、「かあいそう」の正体などを解明しながら、賢治がこの作品に託したものについて考察する。

2. 黄いろのトマトについて

田淵俊人『まるごとわかるトマト』（2017年 誠文堂新光社）によると、日本にトマトが入ってきたのは1670年で、ポルトガル人が長崎に持ち込んだとある。また、トマトは江戸時代には観賞用として栽培され「唐柿」と呼ばれるが食用にはならず、1869年に開拓使がアメリカから野菜として輸入して試作が行われてから食用として認識され、1876年には大藤松五郎がトマトの缶詰を試作、1885年6月3日には鹿鳴館の晩餐会メニューにサラダとして登場していたと記されている。

しかしながら、トマトは海外から輸入された他の新しい野菜とは異なり、「トマト臭」と呼ばれる独特の香りのためにその消費は都会の知識階層に限られていたようであるが、1903年にカゴメ創業者の蟹江一太郎がトマトソースの製造に着手すると、当時の洋食人気と相まって、一気に人気商品となる（p.93）。

カゴメの「トマト大学」（<https://www.kagome.co.jp/syokuiku/knowledge/tomato-univ/literature/> 2020年10月5日22:00）には、

明治1903（明治36）年に第1号のトマトソース（現在のトマトピューレー）が完成。高い評価を受けるとともに事業規模も拡大。5年後の1908年には、トマトケチャップとウスターソースの製造を開始しました。

当時はコロッケなどの洋食がもてはやされていたこともあり、トマトケチャップにさきがけてウスターソースが一気に大ヒット。さらに大正初期から昭和にかけて、家庭料理の洋風化がすすむにつれ、トマトケチャップは大きく売り上げを伸ばし、私たちの家庭にもなじみの味として定着してきたのです。

とある。

ちなみに、カゴメは品種改良も行っており、「黄いろのトマト」に登場するポンテローザやジュンピンクをもとにして、大正時代に「愛知トマト」という品種を作り、このトマトは生食用と加工用

のどちらにも使われたとある。

明治維新から昭和初期まで、トマトは輸入品種をそのまま栽培していたようである。経済品種として、大正時代初めには赤色で小さな果実をつけるイギリス系の品種であるベストオブオールなどが一般的であったが、果実があまりにも小さかったので、昭和初期には早熟性を必要とする北方地域や温室での栽培に限定されるようになった。そして、トマトの消費が拡大すると、「黄いろのトマト」に登場するポンテローザ（大正末期に導入された桃色系品種）が普及した。この品種は大きな実をつけ、いわゆる「トマト臭」は少ないため、トマトを食べなれない当時の人々にもおいしいと感じられ、消費者側からも歓迎された（同上『まるごとわかるトマト』 p.90）。

この『まるごとわかるトマト』には「ちなみに、宮沢賢治の著書『黄いろのトマト』にもポンテローザとレッドチェリーが登場する」（p.91）と記されており、「黄いろのトマト」という作品が日本のトマト史においても重要な資料であることがわかる。昭和13年ごろから、このポンテローザに代表される桃色系品種を基にF₁育種もはじまり、これを契機に日本のトマト品種は次第にF₁品種が主体となる。この作品でわざわざポンテローザの名前をだしたのも、賢治の先見の明であるといえよう。これは当時、賢治が稲作で陸羽132号を推奨したのと同じである。

一方のレッドチェリーについては、『まるごとわかるトマト』 p.97に、

品種名：Red Cherry

輸入元：アメリカ

特徴：果径3～4 cmの小型で球形の品種。生食に用いられる。1840年に紹介された古い品種の1つで、日本では大正～昭和初期に栽培され、生食として用いられた。外果皮はやや硬く、野生種トマト *Lycopersicon esculentum* var. *cerasiforme* の中から食味の優れる系統を選抜したといわれる。

とあり、【HORTUS社】イタリアントマト（ミニトマト）・レッドチェリーの説明書きに、「メキシコ原産で野生種にちかく家庭菜園でも手軽に栽培が可能ですが、長雨が苦手で、水遣りは乾いたら少量を回数多く。トマトの赤色はリコピンで発ガン抑制効果に注目です!! ■生産地 イタリア 内容量 1g」とある。このトマトは名前の通り、「赤い実がつく」ためにレッドチェリートマト（作品中にはレッドチェリーの表記もある）と呼ばれている。ではなぜ、5本のレッドチェリートマトのうちの1本から黄色のトマトがなったのだろうか。

周知の事実であるが、レッド系からイエロー系のトマトはならない。要するに5本の苗のうち1本は元々イエローチェリートマトの苗であったということになる。

キリヤ化学ホームページ（<http://www.kiriya-chem.co.jp/q&a/q01.html> 2020年10月5日22:30閲覧）には、「赤いトマトにはカロテノイド系色素のリコピンが含まれていて、赤く見える」、「カロテノイドは二重結合が連なったポリエン構造をしています。ポリエンが長くなると青い光を吸収して、赤と緑の光を反射しますので、黄色に見えます。ポリエンがさらに長くなってリコピンのようになると、青と緑の光を吸収して、赤い光だけを反射するようになり、赤く見えます。」とあり、赤色と黄色の色素の違いが説明されている。

また、『野菜大図鑑』（<https://vegetables01.xyz/archives/1064> 2020年10月5日23:00閲覧）には、「クロロフィルがリコピンに変わるとトマトは赤くなるが、このとき他の色素であるカロテンやルティ

ンなどの色素も作られ、どの色素が強く出るかでトマトの色が変わってくる」とあり、トマトが黄色くなるのは β -カロテンが豊富だからであると述べられている。

ここで登場する3種類（赤・青・緑）の色であるが、ペムペリとネリ你的生活空間もこの3色のガラスで構成されている。これはまた、子どものお絵かきになくてはならない色でもある。

このように、黄いろのチェリートマトがレッドチェリートマトでないことは、大人であれば誰でもすぐに気づくが、子どもの感覚ではそれは未知なる不思議なトマトに思えたのであろう。

もっとも、拙宅では今年（2020年）「桃太郎ゴールド」というオレンジ色のトマトを育てたが、子どもはもちろん、大人までもが見たことのないトマトが気に入り、近所の人々が毎日観察していたそうである。実ったトマトを子どもたちに採らせたところ、宝物のように大切に家に持って帰った。それまで見たことのないものに対する驚きが、トマトを宝物に変えてしまったのであろう。

また、トマトには愛称があり、イタリアでは黄色の果実をつけるトマトを「黄金の果実（ポロドーモ）」、フランスでは「愛の果実」、イギリスやドイツでは「愛のリンゴ」などと呼ばれている（同上『まるとわかるトマト』p.186）。

たしかに、このような伝承を考えると、黄いろのトマトはアダムとイブのリンゴを連想させるが、ペムペリとネリはサーカスでの件で悲しみに打ちひしがれただけで、特に知恵を得たというわけではないし、楽園（二人の家）を追放されたわけでもないことから、特に黄いろのトマトが禁断のリンゴと同じというわけではないだろう。

しかしながら、この物語には読者に勘違いを生じさせる要素が多く含まれている。まず、二人の家は「果樹園」とあるのに、果物の木が全く登場せず、トマトとキャベツ畑の仕事と小麦挽きだけが蜂雀の話の中に登場する。しかも、小麦を水車で挽く場面を見ると、ネリが運搬に疲れるほど一度にたくさん挽いているため子どもが二人で食べるにはかなりの分量となっておりキャベツもトマトも同様である。

賢治の作品に欠かせない野菜として登場するキャベツであるが、

冬季に貯蔵可能な野菜として、明治前期の導入当初から盛岡近郊の民間育種家を中心に積極的に受容され、明治30年代には「南部甘藍」が育成された。また、大正期頃からは、盛岡近東で生産されたキャベツが東京市場へ出荷され始め（中略）産地仲買人が、農家に対して、種苗や肥料を提供し、青田買いによる買い取り方式が一般的であったが、農家にとっては、唯一ともいえる換金作物であるだけでなく、お盆や秋祭りの前の現金収入を得られる等、様々なメリットがあった。（清水克志「岩手県北部における野菜産地の形成とその歴史的基盤」2010 人文地理学会大会抄録 p.77）

作物でもあり、また、ポンデローザは「桃色で甘い品種が好まれた」（トマトバイオカフェ「トマトの魅力～野生種から今日のトマトまで」暮らしとバイオブラザ21 <http://www.life-bio.or.jp/topics/topics602.html> 2020年10月5日23:30閲覧）トマトであった。ペムペリとネリの兄妹は市場に出せば収入になる立派な作物を育てながら、外界との関係を自ら閉じ、厚いガラスの中で二人だけの生活を送っていた。そして、二人を「かあいさう」と言い続けた蜂雀も、実は二人の生活には何の干渉もできずに見ているだけであった。

ではなぜ、ペムペリとネリは二人だけの世界に閉じこもってしまったのだろうか。

3. 登場人物について

蜂雀が最初に、「ペムベルとネリは毎日お父さんやお母さんたちの働くそばで遊んでみたよ」と「私」に語るが、その後のページはなくなり、すでに兄妹が二人で生活している場面にかわる。

親と離れた子どもたちだけで生活する話は『ピーターパン』のネバーランド（ネバー、ネバーランド）のようであり、現実とかけ離れた子どもだけの世界がそこにあるように感じられる。ネバーランドは妖精の粉を振りかけないと行くことができない非常に遠い場所にある。そして、ペムベルとネリがサーカスを見に行く〈現実の世界〉も二人の家からは遠いところにある。

『ピーターパン』と「黄いろのトマト」は内容的には全く異なっているが、子どもだけの世界や子どもの世界と大人の世界（現実）とのギャップに関しては、近いものがあるといえよう。そして、子どもだけの世界が決して幸せで楽しいだけのものではないということも同様である。

また、「私」が蜂雀に「おとなはそこらにいなかったの。」と尋ねると、蜂雀は「おとなはすこしもそこらあたりには居なかった。なぜならペムベルとネリの兄〔妹〕の二人はたった二人だけずるぶん愉快にくらしていたから。」と答える。ここから、二人が自らの意思で二人だけの生活を送っていることわかる。これもネバーランドと同様である。

また、蜂雀の話には「二人が青ガラスのうちの中に居て窓がすっかりしめてると二人は海の底に居るやうに見えた。そして二人の声は僕には聞こえやしないね。それは非常に厚いガラスなんだから。」とあり、二人の世界は透明ではあるが、外界と断絶されていることもわかる。

一方で、蜂雀は常に傍観者である。「ネリちゃん、あなたはむぐらはすきですかとからかったりして飛んだんだ」と言ってもネリからの反応はなく、ペムベルが黄いろのトマトを家にとりに行く際に蜂雀はネリの心配をしながらもその安全性を確認してペムベルについていくが、ここでもただ飛ぶだけで、ネリやペムベルの行動に関与するということはない。実は蜂雀さえも二人の世界の外にいるのである。

しかも、唯一ネリが蜂雀の方をちらちら見たのは、蜂雀がペムベルと一緒に黄いろのトマトを取って草場に戻ったときであるが、それも蜂雀ではなく、単に兄と黄いろのトマトを見ていただけかもしれない。その後、二人がサーカスの番人にひどい仕打ちを受けても、蜂雀は何の関与もしない。つまり、蜂雀は単なる傍観者であり、語り手であって、実際に二人とは全く関わっていないのである。

この物語は天沢退二郎が『宮沢賢治全集 6』（1985年 筑摩書房）の「黄いろのトマト」解説で「入れ子のまた入れ子という構造」（p.526）と述べているように、ペムベルとネリの話はあくまでも蜂雀が語ったものであり、二人が「かあいさう」なのはあくまでも蜂雀の「かあいさう」という言葉によるものでしかない。

この蜂雀は最初は「眼が赤」と描かれているが、黙り込んでしまった時の眼は「すっかり黒い硝子玉」に変わってしまう。蜂雀とはハチドリの異名であり、実際の眼は黒く、赤くはならない。また、「黒い硝子玉」に変わった後の蜂雀の目の色については、話を再開して以降はどうなったかは本文に描かれておらず、なぜ最初は「眼が赤」だったのかも不明である。

「ペムベルとネリのかあいさうな話」の語り手である蜂雀であるが、「私」にとっては町の博物館の中で一番好きな存在であり、その執心ぶりは朝早くから門番のおじいさんに頼んで展示ケースの前に

立つほどであった。このことから、「私」にとって、番人のおじいさんとこの蜂雀は特別な存在であることがわかる。

その一方で、番人のおじいさんは「この蜂雀はよくその術をやって人をからかうんだ」「あんまり長くなって厭きっちゃうとこいつは又いろいろなことを云いますから」（※下線は筆者）と「私」に話し、番人のおじいさんが蜂雀を叱りつけると、だまり込んでいた蜂雀はまた話し出す。

番人のおじいさんが「私」のことを心配しており、蜂雀をいたずらの常習犯として警戒していること、蜂雀が「又いろいろなこと」をいうとして南国の蜂雀をアイスランドへ送るという極刑まで口にしていることを考えると、この蜂雀は本当にたちが悪いのかもしれない。

二人の物語は、

ペムペルとネリという二人だけの楽しい世界に生きている兄妹がトマトを育てている中で、偶然にも黄いろのトマトができた。その美しさに二人はそれを黄金だと思った。ある日いい匂いの風に乗ってサーカスが来たことを知った二人はそのあとを追ひ、サーカスを見たいと思うが、木戸賃がない。そこで、家に成っている黄色のトマトを大急ぎで取ってきて、サーカスの番人に渡して中に入ろうとしたところ、罵られ、トマトを投げつけられる。周囲からも嘲笑をうけながら逃げ帰り、大声で泣いた。

というあらすじである。

これについて杉浦は、上記のように「純真な心意のままの生がそのゆえに悪罵・嘲笑にさらされ、心に傷をうけるという、異なる価値の世界観の世界を初めて認識することのひとつのありよう」（同上 p.84）であるとし、「成人の世界に立ってみれば、純真とは単なる無知の謂に他ならない。それが、ペムペルとネリに悲劇をもたらすことになるのである。」（同上、p.80）と指摘している。

また、天沢退二郎は「なにがそんなに《かあいそう》なのか。（中略）ペムペルたちを泣かせたのは決して番人でもなければ嘲笑でもなく、〈大人の世界〉でもない。それは「黄いろのトマト」を作品としてなりたせた核心そのものである」（同上、『宮沢賢治全集6』解説）と述べている。

また、西田良子は「猫の事務所」の最後を引用して「疎外されたものの悲しみだけでなく、疎外した側の寂しさも指摘することによって、「みんなみんなあわれです。かあいそうです。」とすべてのものに等しく〈慈悲のまなざし〉が向けられているのに対し、「（「黄いろのトマト」では*筆者注）「みんなの笑ひ声がなみのやうに聞こえた」（中略）など、「黄いろのトマト」では拒絶されたものの悲しみは最後まで消えることがない。」（同上、p.31）と述べている。そして、「なぜ賢治は、「黄いろのトマト」の結末をこれほどつらいものにしたのだろうか。ペムペルとネリをなぜ、「二人だけの世界」に追い返したのだろうか」と疑問をも呈している（同上、p.31）。

ところで、先ほどの番人のおじいさんは蜂雀を「いろいろなこと」をいうと怒っているが、それは誰にとって嫌なことなのだろうか。もちろん、聞き手（この場合は「私」）にとってである。

しかも、この蜂雀は思わせぶりの話しかたをしながら、急に黙り込むという「術」で人をからかうという注意もされている。蜂雀の最初の描写に「それは眼が赤く」とあるが、この赤い眼は「私」をからかっていたためであろう。黙って元のはく製に戻ると、番人のおじいさんの手前からかうこともできずに、「その眼もすっかり黒い硝子玉か何かのよう」になってしまうからである。

しかも、自分から「ペムペルとネリのかあいさう」な話をはじめ、「私」が興味を持つと、蜂雀は「ちょっ

とくちをあいてわらふうやうに」して「話してあげるからおまへは鞆を床におろしてその上にお座り。」と、「わたし」が困るようなことを平気で指示する。これは話が長くなるからという意味があるかもしれないが、当時のまじめな子どもにとって鞆の上に腰を下ろすことは「一寸困る」、できるならばしたくない行為であるが、それを無理にさせ、いやがらせをして楽しんでいたのであろう。

「私」がそこまでしたにもかかわらず、蜂雀はペムペルとネリが小麦を挽いたり、キャベツを収穫して楽しく暮らしていたことしか話さず、何度も「けれどもほんたうにかあいさうだ。ペムペルという子は全くいゝ子だったのかあいさうなことをした。ネリといふ子はかあいらしい女の子だったのかあいさうなことをした」のみを繰り返し、口を閉じてしまう。

そのため「私」は泣き出してしまうのであるが、泣いた理由については、

なぜって第一あの美しい蜂雀がたった今まできれいな銀の糸のやうな声で私と話をしてくださったのに俄かに硬く死んだやうになってその眼もすっかり黒い硝子玉か何かになってしまひいつまでたっても四十雀ばかり見てゐるのです。おまけに一体それさへほんたうに見てゐるのかたゞ眼がそっちへ向いてるやうに見えるのか少しもわからないのでせう

ということが最大の理由であり、そのあとに続く、

それにまたあんなかあいらしい日に焼けたペムペルとネリの兄妹が何か大へんかあいさうな目になったといふのですものどうして泣かないでゐられませう。もう私はその為ならば一週間でも泣けたのです。

とあるのを見ると、「私」の最大の悲しみは蜂雀が自分と話をしてくれず、死んだようになってしまった（もともと剥製ではあるが）ことで、その次がペムペルとネリの話であることが理解できる。

また、作品の最後の部分には

「ちゃさよなら、私はもうはなせない。ちいさんと呼んで来ちゃいけないよ。さよなら。」斯う云つてしまふと蜂雀の細い嘴は、また尖ってちっと閉じてしまひ、その眼は向ふの四十雀をだまってみてゐたのです。

私は大へんかなしくなつて

「ちゃ蜂雀、さようなら。僕又来るよ。けれどお前が何か云ひたかったら云つてお呉れ。さよなら、ありがたうよ。蜂雀、ありがたうよ。」

と云ひながら、鞆をそっと取りあげて、その茶いろガラスのかけらの中のやうな室を、しづかに廊下へ出たのです。

とあり、蜂雀の「さよなら」宣言と、「私」がいかに蜂雀を大切に思っているかが記されている。「私」が悲しくなったのは、ここでも蜂雀が元のはく製に戻ってしまい、自分に対して「もう話すことはない」＝「もう話さない」と宣言し、「私」が蜂雀と特別の時間を共有できなくなってしまったからである。

たしかに、ペムペルとネリがサーカスで遭った事件は「かあいさう」である。しかし、それはあくまでも、蜂雀の話を聞いた他人事の「かあいさう」であり、「私」を直接悲しませたのは蜂雀との特別な時間の喪失である。

4. 黄いろのトマトに対する兄妹の過ち

5本のチェリートマトのうちの1本が黄色の実を付けたことに関しては、苗を間違えたとはしか解釈できない。蜂雀が「僕はポンテローザを見ることならもうほんたうに好きなんだ」とあるが、赤い色のトマトは血を連想させ、酸味もあったため、当時の人々からは人気がなく、生では食わずにトマトソースやトマトケチャップにして利用したが、甘い桃色系のポンテローザはトマトの中でも人気の種類であった。大きくて甘い、いかにもおいしそうな実は蜂雀もお気に入りだった。

ところが、ペムペルとネリの兄妹は黄色いトマトの色があまりにも光るため、黄金だと勘違いをしたのである。このような間違いや勘違いは子どもにはよくあることであろう。そのような間違いを奇跡と信じられるのは、子どもの純粋さと無知のゆえである。

しかし、決定的だったのは、二人が「その黄色なトマトをとりもしなけあ、一寸さわりもしなかつた」ことである。大切な存在であったことは理解できるが、せめてトマトに触れていれば黄金ではなく普通の黄色いトマトであることがわかり、サーカスの悲劇は免れたはずである。これに関しては蜂雀も、「そして二人はもちろん、その黄いろなトマトをとりもしなけあ、一寸さわりもしなかつた。そしたらほんたうにかあいさうなことをしたねえ（※下線は筆者）」と言っている。

純粋な子どもの世界であっても、純粋イコール無知という場合もあり、子どもらしい欲望も無謀な行為につながることもある。

なぜ、二人はレッドチェリーを植えたはずなのに、黄いろのトマトができたのかを考えなかったのか。「苗を植える」とあるのだから、苗はどこからか入手したのであろう。それならば、その相手に聞いてみるのが問題解決の最も単純明快な解決方法であったはずである。

そして、そこで苗が違っていたために黄いろのトマトができたとして理解できたならば、黄いろのトマトは単なるイエローチェリートマトであり、黄金と勘違いすることもなかったのである。

また、黄いろのトマトがなったときに少しでも触れていれば、また試しに1粒でも収穫していれば、それが黄金ではなく普通のトマトであることも理解できただろう。

しかしながら、黄金だと勝手に思いこみ、全く手も触れず、黄金が必要になった際に確認もせず、それがその通りであるように、欲望のまま「もう真っ黒に見えてゐるトマトの木から、あの黄いろの実のなるトマトから、黄いろのトマトの実を四つ」とってきた。蜂雀は初めから黄金ではなく、黄いろのトマトだと言い続けている。言い続けていたが、ペムペルとネリにはその言葉は届かなかったのである。

そして何より、ペムペルがトマトをとった際に、この黄いろのトマトがトマトであり、黄金でなかったことに気づかなかったことは不自然である。ペムペルとネリは以前からトマトを栽培しており、立派なキャベツを栽培し、小麦を挽くなど農業に精通しているはずである。それとも、黄金自体を知らなかったため、黄金色に輝くもの＝黄金と勘違いしていたのであろうか。

もしトマトだと気づいていたならば、サーカスの番人からひどい目に合わずにすんだばかりか、欲を出してもぎとるまで手を触れることもしなかった大切な黄いろのトマトを、まるで価値のないもののように投げつけられ、妹にけがをさせることもなかったはずである。

しかしながら、黄金だと信じ込んでしまったペムペルは、トマトをとった後もそれをトマトの実と

してではなく、黄金として自らの欲のために使用しようとした。

これはすでに子どもの純粋ではない。目先の欲のために本質を見失い、自分たちの大切なものを見失ったというよりほかになく、結果として自分たちを傷つけてしまう。

ペムペルの涙は、サーカスの番人から受けた行為による悲しみというよりは、自分の欲から真実が見えなくなり、大切な妹を傷つけ、大切なものを失った後悔と悲しみなのではないかと考えられる。

5. 作品の背景

この作品は大正13年（1924年）春～昭和5年（1930年）に執筆したとされ、最初の構想は大正13年4月の心象スケッチ『春と修羅』第1集出版と関係があるとされているが、多くの研究者が論じているように、賢治とトシとの間に〈黄いろのトマト的なもの〉があったのかを考えてみる。

工藤哲夫は「『黄いろのトマト』—二人だけの世界—」（同上）で

「黄いろのトマト」は時系列的に「トシとの離別と「〔手紙 四〕」の間に位置することになる。話は最初に戻る。「黄いろのトマト」は〈二人だけ〉の世界とその崩壊を描いたものであった。〈二人だけ〉の強調と悲劇的結末の意味するものは、未だ〈仏法〉の了悟に至らぬ賢治が、そこ「に近づく一あし」として、一度は自らの悲しみの体験をこそ徹底的に作品化することによって一種の自己治療を試みた。（p.83）

と述べている。

確かに賢治にとって、黄金にも勝るものは信仰であった。

しかし、当時の賢治は恋愛などのために信仰の道を外れ、自分の心のままに生きてしまったことが、『心象スケッチ 春と修羅』第一集の作品からもうかがえる。たとえば、詩「白い鳥」に「それはじぶんにくすくふちからをうしなつたとき/わたくしのいもうとをもうしなつた」とあるが、「黄いろのトマト」も同様である。純粋に黄いろのトマトを大切にしていた時は、ペムペルとネリにとってそれは確かに崇敬すべき宝物であった。しかしながら、サーカスという誘惑に負けて欲を出し、手も触れずに大切にしてきたトマトを金＝自分の欲望を満たすものと考えたことで悲劇は起こる。いわば、黄いろのトマトへの畏敬の念をなくしたための悲劇ともいえよう。

法華經の行者として生きた賢治は、妙法蓮華經の本体である森羅万象を心にうつったありのままにスケッチする「心象スケッチ」という手法を生みだした。

『法華經』の法門には、諸法実相と一念三千の法門がある。天台の觀法では、一瞬一瞬の心の在り処が一念三千であり、その時々姿（諸法）は必ず実相であるとするのが諸法実相である。要するに心（一念）は必ず三千世界を具し、それは全て諸法実相である。

『御書』にも「十界の依正の當躰、悉一法ものこさず妙法蓮華經のすがたなりと云經文也」（『諸法實相鈔』（『昭和新定 日蓮大聖人御書』第二集 大石寺 1979年）とあり、この世界、宇宙の一切はこれ妙法蓮華經の眞の姿であるため、「さてこそ諸法と十界を擧げて實相とは説かれて候へ。實相と云は妙法蓮華經の異名也。諸法妙法蓮華經と云事也」（同上 P.980）となる。

作品にあてはめると、トマトを黄金として育てたペムペルと、トマトを黄金として差し出したペムペルとは心のありかが全く違うということである。

黄金のトマトを大切に二人は、黄いろのトマトに対して敬虔であった。それは、賢治にとって『春と修羅』第一集に掲載されている「永訣の朝」のみぞれや「松の針」の松など、兄妹二人にしかわからない天の恵みと同等であったと思われる。それだけ黄色のトマトはペムベルとネリにとってはかけがえのないものであった。

ペムベルとネリが厚いガラスの家に住んでいたのも、周囲に理解されなかった信仰を賢治とトシの二人で純粋に共有し、信仰者として自然とともに純粋に生きようとした姿を描いたのかもしれない。

しかし、賢治は恋愛や家業への嫌悪などの「修羅」により、純粋な信仰の道から外れてしまい、そのような中でトシは病死してしまう。

子どもの純粋さは信仰の純粋さに近いものがあるかもしれない。だからこそ、子どもであっても物事の本質をしっかりと見据えて間違わず、欲にとらわれないことが大切なのである。

「私」が蜂雀と「茶いろいガラスのかけらの中のやうな室」で時間を共有したのも、賢治とトシ、ペムベルとネリと同じような関係なのかもしれない。

なぜなら多くの研究者が指摘するよう、「私」にとっての蜂雀は、ペムベルとネリにとっての黄いろのトマトと同様に大切なものだからである。

しかしながら、「私」とペムベルとの大きな違いは、ペムベルは黄いろのトマトを私利私欲のために利用したのに対し、「私」は朝早くから学校に行く前に博物館に寄り、蜂雀のことを最後まで一番に考えて大切にしたことである。それにより、ペムベルは悲劇を生み、「私」は博物局第十文藝官になる。

6. まとめ

宮沢賢治童話「マグノリアの木」に、

「ええ、ありがとう、ですからマグノリアの木は寂靜です。あの花びらは天の山羊の乳よりしめやかです。あのかおりは覚者たちの尊い偈を人に送ります。」

「それはみんな善です。」

「誰だれの善ですか。」諒安はも一度その美しい黄金の高原とけわしい山谷の刻みの中のマグノリアとを見ながらたずねました。

「覚者の善です。」その人の影は紫いろで透明に草に落ちていました。

「そうです、そしてまた私どもの善です。覚者の善は絶対です。それはマグノリアの木にもあらわれ、けわしい峯のつめたい巖にもあらわれ、谷の暗くらい密林もこの河がずうっと流れて行って氾濫をするあたりの度々の革命や饑饉や疫病やみんな覚者の善です。けれどもここではマグノリアの木が覚者の善でまた私どもの善です。」

諒安とその人と二人はまた恭しく礼をしました。

とあるが、このマグノリアの木は一念三千の姿そのまま、つまりその存在自体が覚者の善＝仏の悟り＝法華經の諸法実相ということになるだろう。

寂靜とは涅槃寂靜のことであり、煩惱をまったく寂滅した安住の境地のことである。天台大師・智顗は『法華玄義』において、三法印は小乗の仏説であって大乘の法印は諸法実相印のみであると説い

ている(多屋頼俊・横超慧日・舟橋一哉, (1995-04). 新版 仏教学辞典. 法蔵館. p.400)。

「黄いろのトマト」も同様で、トマト自体にではなく、それを見る側の一念三千により、黄金にも、ただの小さな黄色いトマトにもなる。

また、仏教は因果応報であり、善因善果・悪因悪果ということばがあるように、ペムベルが黄いろのトマトを黄金のように大切にしていたときは黄いろのトマトもまた黄金のように輝いていたが、その黄いろのトマトを私利私欲のために使おうとした時には、ただのトマトに戻っており、さらに妹のネルをも傷つけてしまうのである。

以上のように、たとえ子どもであっても、この世は諸法実相であり、そして、物事をとらえるのは一念三千であるため、ペムベルの物事の本質を見ずに私利私欲に走ったことが因果応報となって、サーカスの番人や周囲の行動を生み、自分のみならず、大切な妹をも巻き込んでしまったのである。

森井弘子は『『黄いろのトマト』小考』(『うずのしゅげ3』1997年5月関西賢治ゼミナール)で、『『ペムベルとネリ』は、大切なトマトを自分たちのエゴの代償とした。賢治はそのあたりは大変手厳しい作家である。』(p.78)とし、

『黄いろのトマト』においても、同じで、二人の心意が悪意と化したときにその素材である「黄いろのトマト」もなくなるのである。

「かあいさう」なのは、必ずや通らなければならない大人への道を経験してしまい、「純真な心意」をなくしたことかもしれない。しかし、真の悲しみは、自らが「純真な心意」をなくしたことにある。(p.79)

と述べている。

たしかに、二人の兄妹に悪意はない。しかし、黄いろのトマトが黄金に感じられたのはあくまでも二人の空想の世界においてであって、諸法実相の現実世界で黄いろのトマトはあくまでも黄いろのトマトでしかなく、黄金にはならないのである。

それどころか、諸法実相の姿である大切な黄いろのトマトを自分の欲望のために無駄にし、相手を馬鹿にする無価値なものとしてサーカスの番人に投げ捨てられ、妹をも傷つけてしまうことは悪因悪果である。

しかしながら、ペムベルとネリにそれを教えてくれる存在は蜂雀はもちろん、誰もいなかった。なぜならば、そこは大人のいない世界だったからである。もし両親がいたならば、二人はこのような愚行をすることはなかっただろう。二人が「かあいさう」な理由は二人だけの子どもの世界に住んでいたということに起因する。

では、「私」はどうであろうか。「私」が大変悲しかったのは、あくまでも、「蜂雀の細い嘴は、また尖ってちっと閉ぢてしまい、その眼は向ふの四十雀をだまってみてゐた」からである。「私」にとって一番大切なのは蜂雀であり、蜂雀の離別宣言によりそれまでいた子どもの空想世界と別れることになる。

つまり、それまでいた「茶いろガラスのかけらの中のやうな室」から廊下へ出たとたん、「あまりの明るさ」のため現実の世界に戻るが、反対に現実世界にいたたまれずにまた自分の世界(ガラスの家)に戻らざるを得なかったペムベルとネリの兄妹を考え、「かあいさう」だと思い、「涙がぼろぼろこぼれた」のであろう。

それは、最後に「私の未だまるでちいさかった時のことです。」とあるように、大人になった今ではその時の感情とはまるで違っていると述べていることから理解できる。

これについて矢花真理子は「宮沢賢治『黄いろのトマト』論—〈私〉が回想することの意味／〈奇体〉というモチーフをめぐる—」(『白百合女子大学言語・文学研究センター言語・文学研究論集(15)』白百合女子大学言語・文学研究センター 2015)で、蜂雀との交流が絶たれてしまった「私」の悲しみを、ペムベルとネリの兄妹の「珍しいものに手が届きそうに見えた瞬間その道が絶たれた悲しみ」(p.50)に同化して涙を流したとし、「珍しいものが持つ〈奇体〉さは、それに手が届かないことによって保持されていると言えよう。」(p.50)と指摘している。

確かに、〈奇体さ〉というものは正体がわからないことが魅力である。

しかしながら、その世界への憧憬を異なる形で現実に転換することは可能である。語り手である「私」は『校本宮沢賢治全集第八巻』校異によると作品原稿の表紙に「博物局第十六等官／キュステ誌」と鉛筆で加筆されているからである。「私」は子どものころからの博物館好きが高じて博物局に入ったのであろう。この作品は博物館をよく知る大人が語る、子どものころの話である。「私」はペムベルとは異なり、子どもの世界を子ども時代の宝物として認識し、大切にしたい。そして、星の好きな子どもが星空に夢を持ち大人になって天文学者になるように、「私」もその宝物と現実的に向き合うことのできる大人になったのであるが、博物局第十六等官キュステが今でも蜂雀と話ができるのかと言えば、答えは否であろう。大人になったキュステにとって蜂雀のいる部屋はもう子どもの世界である茶色のガラスのかけらでなく、真剣に向き合う職場である。大人になり、そのガラスの世界が壊れてしまえば、見えるのは確かな現実と真実である。ペムベルとネリの物語も、子どもの純粋な世界を大人に踏みにじられたというよりも、子どもの世界の儚さ、脆さ、危うさというものを象徴していると考えられるのではないだろうか。そして、大人になった博物局第十六等官キュステ氏がなぜ、この物語を記したかを考える必要があるだろう。

中地文は「『黄いろのトマト解説』」(『『國文學 解釈と教材の研究』2003年2月 學燈社))で、大人になった「私」の回想する物語には喪失体験が何重にも組み込まれている(中略)そうしてみると、これはひたすら感傷的な物語なのであろうかと疑義を呈し、「『わたしの未だまるで小さかった時のことです』と簡潔な言葉で回想を閉じる『私』は、少なくとも感傷におぼれているようには見えない。(p.55)

と述べている。

この作品は様々な要素を含んでいる。

賢治がこの作品を書いた目的は、小沢俊郎が『宮沢賢治論集1 作家研究・童話研究』(有精堂出版 1987年3月)で「黄いろのトマト」は「『尋四年以下』に適する要素を持っている」(p.253)と述べているが、これは作品を読み解く重要な要素であろう。

『法華経』は諸法実相・一念三千であり、森羅万象の法であり、大人も子どもも全てが平等であると説かれている。

子どもの純粋さは、倫理ではなく感情である。感情の変化そのものは一念三千であるため、子どもの純粋さが私利私欲を持つことで危うさとなり、罪の意識がなくては悪因を生じれば悪果となる。賢治は作品を通じて、心の在り方について子どもたちに考えてほしかったのかもしれない。

参考資料

- 『新校本 宮澤賢治全集 第9巻 童話Ⅱ』(1995年6月 筑摩書房)
- 天沢退二郎「黄いろのトマト」解説(『宮澤賢治全集6』1985年5月 筑摩書房)
- 原 子朗『新宮澤賢治語彙事典』(1999年7月 東京書籍)
- 渡部芳紀『宮澤賢治大事典』(2007年7月 勉誠出版)
- 『昭和新聞 日蓮大聖人御書』大石寺 昭和54(1979)年
- 田淵俊人『まるごとわかるトマト』(2017年5月 誠文堂新光社)
- 松田司朗『宮澤賢治の童話論—真相の原風景』(1986年5月 厚徳社)
- 小沢俊郎『宮澤賢治論1. 作家研究・童話研究』(1987年3月 有精堂出版)
- 『別冊國文學6 宮澤賢治必携』(1980年5月 學燈社)
- 中地文「黄いろのトマト」解説(『國文學 解釈と教材の研究』2003年2月 學燈社)
- 杉浦静「『黄いろのトマト』試論」(萬田務・伊藤眞一郎『作品論 宮澤賢治』1986年7月双文社出版)
- 矢花真理子「宮澤賢治『黄いろのトマト』論—〈私〉が回想することの意味／〈奇体〉というモチーフをめぐる—」
(『白百合女子大学言語・文学研究論集(15)』2015年白百合女子大学言語・文学研究センター)
- 森井弘子「『黄いろのトマト』小考」(『うずのしゅげ3』1997年5月 関西賢治ゼミナール)
- 西田良子「『黄いろのトマト』」『国文学 解釈と鑑賞』(2000年2月 至文堂)
- 宇佐美怜子「『黄いろのトマト』小考—ペムベルとネリの「かあいさう」を探る—」(『宮澤賢治研究Annual 19』
2009年)
- 押野武志「ロマン派の子供観の諸問題—賢治童話の中の子供たち」(『日本近代文学(55)』1996年10月)
- 工藤哲夫「『黄いろのトマト』—〈二人だけ〉の世界—」(『國文學 解釈と鑑賞61(11)』1996年11月 至文堂)
- 黄英「『黄いろのトマト』—サーカスを手掛かりに—」(『國文學 解釈と鑑賞66(8)』2001年8月 至文堂)
- 清水克志「岩手北部における野菜産地の形成とその歴史的基盤」(2010年人文地理学会大会 抄録)
- カゴメの「トマト大学」(<https://www.kagome.co.jp/syokuiku/knowledge/tomato-univ/literature/> 2020年10月5日
22:00閲覧)
- キリヤ化学ホームページ(<http://www.kiriya-chem.co.jp/q&a/q01.html> 閲覧 2020年10月5日22:30 閲覧)
- 野菜大図鑑(<https://vegetables01.xyz/archives/1064> 2020年10月5日23:00閲覧)
- トマトバイオカフェ「トマトの魅力～野生種から今日のトマトまで」暮らしとバイオプラザ21
<http://www.life-bio.or.jp/topics/topics602.html> 2020年10月5日23:30)

The study of “*Yellow tomato*” by Kenji Miyazawa

TAKAHASHI Naomi

Abstraction

Until now, “Yellow tomato” which was written by Kenji Miyazawa has regarded as a growing up story form child to adult through the tragic incident between old brother and young sister. However, a connection between this story’s hero (I) and the stuffed hummingbird that is exhibited at the museum and Kenji’s mental state (before writing this story, he had lost his young sister Tosi) need to consider from the perspective that Kenji had faith in Lotus Sutra. Considerations are as follows.

Children are pure, therefor they are controlled by emotions instead of ethics.

Obeying one’s the condition of being indulgent makes a tragic result.

Even if a person does not feel a sense guilty, retribution is an inevitable consequence of an evil deed.

Additionally, this fairy tale puts together children’s mental growth. For instance, risks of a pure and innocent child and grew children’s curiosity into good behavior etc.

Key words : Yellow tomato, The world of the child, Lotus Sutra, Retribution